

このように、アニミズム論には、大きく分けてタイラー流と岩田流があり、タイラー流は、常に明晰な理性をもつ能動的主体を中心に置く、近代の理性中心主義的な認識論を内包している。したがって、もし近代批判の文脈でアニミズム的なものを再び持ち出したいのならば、受動的視点から出発する岩田流のアニミズム論のほうが有効である。それは、岩田流アニミズムが、認知主体の認識論にとどまらない、主体と環境を含む「自然」の存在論だからである。

御霊信仰の展開過程

米 井 輝 圭

御霊信仰に雷神という要素が取り入れられた起源を探るのが、本発表の目的である。

通常では、菅原道真の怨霊と延長八年の宮中落雷事件が結びつけられたと考えられている。しかし九世紀以前においても、御霊信仰と雷神の接点はあった。もともと雷神は、わが国の各地にみられる火と水に関する神であり、朝廷の尊崇も得ていた。現在の奈良町には御霊神社があり、奈良の御霊信仰の柱となってきたが、祭神として祀るのは井上皇后・他戸皇太子・事代主命であり、社伝では大和国宇智郡の霊安寺から遷ったとされる。

実は、宇智郡（現、五條市）での御霊三神は、井上・他戸、

そして若宮（雷神）という組み合わせを基本としている。霊安寺の御霊神社の「霊安寺御霊大明神略縁起」では、井上内親王が同地に流された時に懐妊して、生まれた皇子を「雷神」と名付けたとしている。そして大明神四所は、井上皇后・早良親王・他戸親王・雷神若宮となっている。なにゆえに雷神若宮の存在を作ってまで祭神の一角を担わせたのであろうか。

宇智郡では都とは別に独自に御霊信仰が展開していったが、郡内の多数の御霊神社のうち、若宮を主祭神とするのが、火雷神社である。「略縁起」では、「雷神若宮ハ御山ノ村ノ内ニ御坐ス」としている。火雷神社は、延喜式内社であり古くからその名であったのが、のちに霊安寺を中心とする宇智郡の御霊信仰に組み込まれることで、祭神が性格を変えたのであった。この火雷神社は、丹生川が吉野川に合流する地点に立地しており、交通の要地を占め、他戸親王墓や井上内親王陵にも至近である。ゆえに火雷神社が非常に早くから霊安寺の影響下に入ったと推測しても問題ないかと思われる。井上が配地で皇子を産み、その皇子が雷神という名とされたのは、実在の井上・他戸とともに三神の親子関係を組み、距離的に近い三ヶ所をひとつくりにするための作爲だったのだろう。

さらに二・三の問題を提起しておきたい。まず第一は、八世紀以降の仏教の教線拡大において、この地が重要であったことである。僧侶が山林修行を行う必要からも、南の方へ拠点を作っていく動きの中で、霊安寺の立地は、宇智・賀名生・熊野と続いて、山中の聖地と往来するための重要なルート上にあたり、吉野川南岸へ進出するための拠点であった。また、ここは

第15部会

葛城山と熊野山地とを最短距離で結ぶ道筋でもあった。さらに、高野山の真言宗の聖地でもあった。したがって火雷神社も、早くからこうしたルート形成の流れに巻き込まれていったのであろう。

もうひとつは、十世紀の僧、貞崇のことで、宮中落雷を雷神と結びつける作業をしたとされている。彼が当時、清涼殿に伺候する僧であったことは確かである。この貞崇が、宇智郡の若宮火雷神のことを知っていて、こうした言説を行ったと仮定しても、実は不思議はない。彼は、三十年以上も金峰山の辺で修行していたからで、都との間を往還しながら山林修行に励んでいた僧である。地理的に豊富な知識を有していた貞崇が、宮中落雷を雷神のしわざとする言説を広めるのに一役買っていた可能性は高い。

もともと雷神は火と水の神であるため、貞観の神泉苑御霊会が水辺の鎮祭であったように、御霊信仰との親和性は高かった。井上内親王が生きたまま龍になり祟りをなしたとする説と、貞崇の説話で火雷神が亀の形をとっていたこととは、モチーフが共通する。こう考えると、京都の御霊社が祀る「八所御霊」に「火雷神」が入っていて、奈良の御霊神社に火雷神がないという事実は、雷神を御霊信仰に結びつけた功が、(南都仏教ではなく)真言にあったことを物語っているとも思うのである。

ト占技術から

思索・信仰・実証科学への展開

平野 孝 國

人間が生きる上で最も大切なことは、衣食住を調達し、異性を得て性欲を充足することである。人間社会には膨大な知識と行動体系が蓄積されている。就中、明日の生活環境に関わる技術でありながら、実証をえぬまま、昔ながらに守っている行いがある。「うらない (Divination)」である。

ギリシャの古代世界では、日常生活から、国家的な政治、戦争、遠征にかかわる重大問題まで、占い師の判断、憑依者の託宣を指針とした。失敗は依頼者の罪、占い師の罪として処罰し、更迭された。

一般に、鳥の挙動・さえずり・飛び方・去来する方角により、吉凶と運命を判定する占鳥術が行われた。⁽¹⁾金銀を浮かべる水占い・鏡に糸を付けて泉に垂らして見る鏡占い・木の揺れ方・ざわめき・葉叢・青銅器の音からゼウスの神託を聞く占い。鉛に瑕を付けて司祭に見て貰う鉛占い等があった。星占いは最も古く、天文学となる。

ここで注意すべきは、これら占い師の列に立って、哲学史上有名なソクラテス・プラトン・アリストテレス等の名があることである。彼等は諸現象の未来を予言し、神意を占ったばかりではない。事物の考察から、根本原理を洞察出来ると考えた。